

清末中国における複式簿記用語の形成

—楊汝梅（予戒）による下野直太郎『簿記精理』の翻訳とその影響—

戸 谷 将 義

1. はじめに

中国における近代会計学の幕開けとなった複式簿記の受容は、次の二冊の文献に代表される。一冊は蔡錫勇の『連環帳譜』（以下、蔡錫勇（1905））、もう一冊は謝霖と孟森による『銀行簿記学』（以下、謝霖・孟森（1907））である。前者は1905年に湖北官書局から出版され、その内容は西洋の簿記法を中国向けにアレンジしたものであった。後者は1907年に日本の商業編輯社より出版され、底本を日本の簿記書とした翻訳文献である。この二冊の文献は、中国近代会計史において必ず注目されてきたが、その間の1906年に世に出た楊汝梅（予戒）による日本語文献『簿記精理』の翻訳文について言及した研究は管見の限り存在しない。

本稿では、1906年に清国人日本留学生によって刊行された雑誌『新訳界』を取りあげ、そこに掲載された楊汝梅による下野直太郎『簿記精理』の翻訳文に着目し、その記事が中国語の複式簿記用語形成に与えた影響について考察する。中国語へ翻訳された『簿記整理』の位置づけを明確にするため、前後の文献である蔡錫勇（1905）と謝霖・孟森（1907）の概要について論じた後に、翻訳者である楊汝梅の経歴、雑誌『新譯界』の発行状況、『簿記整理』の用語とその影響について論ずる。

なお、同時代に会計学の分野で実績を残した同姓同名の楊汝梅（衆先）という人物が存在するため、二名を明確に区別したい場合、カッコ書きで

字を付けるのが一般的であるが、本稿では特に断りのない限り、カッコ書きのない楊汝梅は全て楊汝梅（予戒）を指すものとする。

2. 中国近代会計史における中国語の文献

2.1 最初の複式簿記書『連環帳譜』

中国では19世紀中葉に入り、西洋から複式簿記の伝播というかたちで近代会計学がもたらされた。1902年には早くも簿記学が教育制度に組み込まれたことを確認できるが¹、中国語の文献が登場するのはそれから数年後である。

中国で最も早く西洋式複式簿記を解説した文献は蔡錫勇（1905）である。蔡錫勇の生没年は諸説あるが、陳元芳（2013）に従えば1847年～1898年である。蔡は広州同文館から京師同文館を経て翻訳官となり、各国で公務にあたった官吏である。一部先行研究に「青年期に日本へ留学した」あるいは「使節として日本へ赴いた」といった記述があるが、最近ではいずれもその事実はなかったという指摘がなされている²。本文は蔡自身の手によるが、蔡の没後、息子の蔡琦・蔡璋が校閲のうえ出版に至ったという。呉績凝による「序文」を見れば本文が数冊の洋書の翻訳により成り立っているとの推測ができるが、具体的な底本は不明で、邵藍蘭（2011）にあるとおり「広く西洋の簿記書を参照し（中略）西洋式簿記を中国風にアレンジしたものである」といえるだろう。

蔡璋は「後述」で「璋属游日本，見其工商百族簿注粲然，国家綜覈財賦調査，至簡而易，然後知簿録之法之良，実為運籌者所不能越，而日本且以列学科之一，烏容翫忽？」と書き記し、日本での見聞を根拠に簿記の重要性を訴えている。校閲にあたっては日本の文献を参考にした可能性がある

1 北京大学・中国第一歴史档案馆 編（2001）『京師大学堂档案選編』北京大学出版社150頁。

2 陳元芳（2013）は『伝音快字』に書かれた序文の「余昔随陳荔秋副憲出使美日秘三国，駐華盛頓四年」に対し、この「日」は「日斯巴尼亞」つまりスペインのことであるとしている。

が、日本について言及している箇所はこの一文だけで、これだけでの判断は難しい。この「後述」の署名部分には「光緒乙巳臘月」とあり、表紙裏の「光緒三十一年歲在乙巳冬日於武昌」と時期は一致する。しかし「後述」より前の頁にある「跋」は湯金鑄という蔡の友人によって書かれたのだが、時期が「光緒三十二年中和節」となっており、この文献の出版年代についてはさらなる考証が必要であろう。

ともあれ、本文献は潘序倫（1941）で「是書出版之後，不特於工商界中無絲毫響應，且其書亦竟不伝，在此三十余年之中，国人之曾讀此書者，能有幾人？」といわれるように、ほとんど影響を及ぼすことはなかった。「設例詳備而稟理不足」ともいわれるとおり、取引事項の羅列から帳簿の見本を並べるというスタイルで、解説が皆無に等しく、たとえ多くの人々の手に渡ったとしても、初めて西洋式の複式簿記に触れる人にとって内容を理解することは容易ならざることであつたと思われる。

用語に関していえば、帳簿の名称や勘定科目名は中国固有の簿記用語をほぼ踏襲しており、日本語からの影響はみられない。邵藍蘭（2011）で「資本」という語は日本より中国に伝わった日本語彙であるといわれているが、『連環帳譜』の「総結單」（試算表）の中にはこの「資本」という用語が登場している。これは蔡もしくはその御子息が明治日本の経済書もしくは簿記書を目にした可能性があるからであろう。」との指摘があるが、その可能性についてはなお検討を要する。なぜなら、「資本」という語は日中語彙交流史の視点からいえば、F. Masini（1993）が「return graphic loan from Japanese」「Used to refer to “financial capital” since the Yuan Dynasty」と指摘するように³、日本から中国への一方通行の語ではないからである。Masiniが指摘したとおり、「資本」という語が元代以来、中国語にも見られるということであれば、「資本」という用語の使用有無だけで日本語文献を参照したか否かの可能性を断ずることは難しい。

3 馬西尼著・黄河清訳（1997）では「來自日語的回歸漢字借詞」「自元朝以來，此詞用來指“金融資本”」と訳されている。

「資本」という語は明末の技術書『天工開物』にもみえ、「費用」あるいは「元手の資金」の意味で使われている。ロブシャイト(1866-1869)やドゥーリットル(1872)には「Capital」及び「Cost」の両方に「本錢」の語釈が見え、用例には「出本」「打本」「折本」といった表現がある。現代中国語においても語素「本」は豊富な造語力を発揮し、後部に「本」をともなう二字漢語は多数存在するが、一方で現代日本語においては「資本」あるいは「元本」の二つくらいである。私見ではあるが、「～本」という二字漢語は極めて中国語的と言えるのではないか。「Capital」と「資本」は日中双方で別個に結びついた可能性がある。1881年の『哲学字彙』の登場はその結びつきを決定づけたかもしれないが、それだけで「資本」が日本語でのみ「Capital」と結びついたとは断定できない。

蔡錫勇(1905)の原本は日本に二冊存在し、一橋大学図書館及び東京大学東洋文化研究所に保管されている。一橋大学図書館所蔵の一冊には昭和26年2月12日に購入との印が押してあり、また「東亜研究所第六調査会学術部委員会」の朱印がある。東京大学東洋文化研究所にある一冊は大木文庫の所蔵で、一帙二冊であり、この点、一橋大学図書館所蔵のものと同じである。

2.2 二番目の複式簿記書『銀行簿記学』

蔡錫勇(1905)に続く二番目の複式簿記書は、謝霖・孟森(1907)の『銀行簿記学』であるといわれている。本稿では楊汝梅(1906-07)をもって二番目としたいところであるが、ここでは先行研究に従い、いったんその背景について見ていきたい。

謝霖の経歴については諸説あるが、おおむね1905年から1911年の間に日本へ留学し、帰国後は商科学人学術に合格、北洋政府期には『会計師暫行章程』を起草し中国初の会計師となった人物であるという。日本へ留学したとの記述はどの文献にも見られるが、出身校については、明治大学商科あるいは早稲田大学商科で割れている。陳元芳(2013)は「明治大学で

法律を学び、早稲田大学商科へ転校し商学学士を取得した」とするが、楊鑫（2005）は「指導教授の染谷恭次郎先生に相談し」「早大校史委員会で」「清朝末年の留学生資料」を探したが謝霖本人の情報は見つからず、「明治大学校史委員会」で見つけ出した「明治大学成績原簿明治四十二年七月（1909年7月）至明治四十四年七月（1911年7月）」に謝霖の名を見ることができたという。謝霖は会計師として正則会計師事務所を創立し、中央銀行秘書長の職につくなど、実務家として活躍する一方、北京大学・復旦大学・光華大学などで会計系主任や商学院院長につくなど、教育の面でも豊富な実績を残した。その謝霖が同じ日本留学生であった孟森と協力して1907年、東京で出版したのが『銀行簿記学』である。

まず謝霖・孟森（1907）の凡例には次のように記されている。

是書理論用森川鑑太郎所著之銀行簿記學，不一遺字，其事實難明之處，稍加按語，餘不敢增損毫末，原書可覆案也。所製帳簿從原圭南指用早稻田商科所定之式，新式較舊式為精，亦間有轉從舊式，譯者而從，無成見也，即有此斟酌。故不稱譯而稱編。又簿式亦間參米田喜作所著簿記學本。米田本為銀行班講師所用之課本，理論太簡，記帳止兩月，遠不逮森川之詳備。

「凡例」によると、理論部分は全編を森川鑑太郎『銀行簿記学』に従い、わかりにくい箇所にはコメントを加えたという。帳簿の形式は原圭南の早稻田商科の形式に従い、「新式」と「旧式」の入れ替えをするなど「斟酌」を加えたため、「訳」ではなく「編」と称したとのことである。

原書の森川鑑太郎『銀行簿記学』は版本がいくつも存在し、「序文」などの記述に詳細が書かれていないことから、謝霖が翻訳の際に用いた底本は定かではない。目次や本文の比較から森川鑑太郎（1901）であると考えても差し支えないだろう。

謝霖によるコメントには次のようなものがある。

按：此論借貸之理，簿記學中借方貸方之名，直萬不可易。向見有人譯家庭簿記，改借方為收款，改貸方為付款者，是固未解文理者也。吾國

文字之差，貸與資相混，其義逐與借字無別。於是借貸二字，成轉注之訓，忘其為對舉之名，以不謬為謬。直以收付當借貸，殊不知收付乃固定之意，借貸乃流動之意。借者必有歸還之義務，貸者必有索還之權利。彼收字中無必付之關係，付字中無必收之關係。就損益言之則可，當損益未定之前，烏能以收付二字，化神奇為臭腐乎？即以人事論之，見借貸二字則顧名思義。知非一成不變之收付，其猶有公私混淆，作無意識之侵蝕者，亦必鮮矣。

これは複式簿記の貸借概念についての解説につけられたコメントである。中国語の「貸」の字は「借」と区別がなく、相對する意味を失っているというが、「借」を「収」、「貸」を「付」と訳すことは適切ではないと述べている。なお、「有人譯家庭簿記」の箇所より、謝霖・孟森（1907）以前にも家庭向け簿記書が翻訳されたことがわかる。謝霖・孟森（1907）に先行する文献として注目に値するが、現在では見つけることができず、何語の文献を元にしたか定かではない。

2.3 『簿記精理』の位置づけ

楊汝梅による『簿記精理』の翻訳文（以下、楊汝梅（1906-07）とする）は雑誌『新訳界』の2号（1906年12月）、3号（1907年1月）、5号（1907年5月）の三回に分けて掲載された。謝霖・孟森（1907）はその奥付によると発行日は光緒三十三年四月初一、つまり西暦1907年5月であるため、一部掲載は先行、全文掲載まではほぼ同時期といえる。しかしながら今まで注目されてこなかった原因は、単著でないためではないかと考える。

複式簿記の導入について論ずる場合、二つの視点がある。二つの視点とは、実務としての技術そのものの導入時期と文献の出版による知識の導入時期である。日本と中国においてはどちらも技術そのものの導入時期の方が先行しているが、資料に乏しいため、実証的な研究はあまり多くない。技術そのものの導入時期を中国側は1858年の天津条約締結以後の海関実務、日本側は1865年の横浜製鉄所の会計実務に求めるのであれば、中国は日

本よりも先行していたといえよう⁴。しかし、中国と日本、いずれも外国人の手による会計管理であったため、単なる初期接触であり、知識あるいは概念の輸入と定着につながったとはいいがたい。知識概念の輸入と定着という点においては、導入時期として文献の出版時期をもって判断するのが適切であろう。そのため、日本では1873年の福澤諭吉（1873）を、中国では1905年の蔡錫勇（1905）をもって最初の複式簿記概念の受容とするのが一般的となっている。ここで問題となるのが“文献”の定義であるが、雑誌記事あるいは新聞記事の類は除外されてきたであろう。よって、単著でないことが、先行研究で楊汝梅（1906-07）を除いてきた原因の一つではないかと考える。

本稿では楊汝梅（1906-07）が中国語の複式簿記用語に一定の影響力を有したという仮説を立てる。その理由は二点ある。第一に、楊汝梅の中国会計学界に果たした役割である。この点に関しては3.1で触れる。第二に、雑誌『新訳界』の影響力である。この点に関しては3.2にて取り上げる。

3. 楊汝梅と雑誌『新訳界』

3.1 楊汝梅の経歴

陳元芳（2013）によれば「楊汝梅（1882-1966年）、字は予戒あるいは玉階、常用のペンネームは湖北楊汝梅、男、湖北省随州市随県人。教授で、会計学者、会計実務専門家、会計教育家、財政専門家である。湖北商業中学堂主任校監、国民政府歳計長であった」「若き頃に日本へ渡り、東京商科大学で8年間留学、主に財政学、商業学を専攻した」と紹介されている。ただし同書注は先行研究の文献に記載の「1903年に東京高等商業学校へ留学した」「日本で8年留学した」「帰国後1909年に…」という記述を挙げ、「楊氏の出国留学と帰国の具体的な時間はさらなる考証が必要」との見解を示

4 技術としての複式簿記の導入時期について、中国事情は郭道揚（1988）、日本事情は大倉（1938）を参照。

している。また、生年にも1879年説と1882年説があるという。

一方で日本側の資料によると、興亜院政務部（1942）には「1879年生。明治42年東京商科大学（元東京高等商業学校）卒業。帰国後湖北商業学堂監督、湖北財政顧問に任じ共和政府成立直前北京に在り、度支部主事。」と書かれている。筆者の調査したところによると、日本入国は1903年3月⁵、東京高等商業学校を卒業したのは1909年7月であり⁶、卒業年に関しては興亜院の調査と一致する。

楊汝梅の日本留学前後の留学先、及び出版物の情報を整理すると表1のとおりである。

表1. 楊汝梅の日本留学期間略年表

年	経歴	出版活動
1903	3月14日、上海より出航、日本へ向かう。	
1904		
1905	9月より東京高等商業学校予科一ノ組撰科生。	
1906	東京高等商業学校本科第一年生三ノ組撰科生。	11月『新訳界』1号「英国商工業之特長」 12月『新訳界』2号「簿記精理」
1907	東京高等商業学校本科第二年生二ノ組撰科生。	1月『新訳界』3号「簿記精理（承前）」 5月『新訳界』5号「簿記精理（続第三号）」 5月『日語用法自習書』を出版。
1908	東京高等商業学校本科第三年生二ノ組撰科生。	『最新商業簿記教科書』を出版。
1909	7月東京高等商業学校卒業。	

1903年3月から1905年9月までの足取りは不明であるが、何らかの留学生向け学校で日本語を学んだと思われる⁷。1907年には日本人と共著の清国人向け日本語教科書を出版し、その序において自身を「日本語で演説を話

5 JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12081623500（第26画像目から）、在本邦清国留学生関係雑纂／陸海軍外之部「湖北ヨリ本邦へ留学生派遣之件」（3.10.5）（外務省外交史料館）

6 東京高等商業学校（1908）で明治42年の学年暦を、東京高等商業学校（1910）で楊汝梅の卒業年を確認できる。

7 王嵐（2004）によれば東京高等商業学校は「文部省直轄学校外国人特別入学規程によって留学生を受入、具体的な細則が制定されていなかった場合」に該当するため、入学前の日本語学習期間は特に定められていなかった。

すことのできる華人」と紹介していることから、留学中に相当高いレベルの日本語能力を身につけたであろう⁸。

楊汝梅は日本から帰国後、湖北商業中学堂の校監（校長）に就任する。周元武・許建国（2008）によれば、湖広総督・張之洞は商業の振興と実業教育を重視、新たな商務管理人材の養成を重んじ、商務学堂の創設を指示、その結果、1907年に武昌で湖北商業中学堂が創立されたということである。1909年に商科挙人に合格した後は、北洋政府、南京国民政府で審計（会計検査）部門の職に就く傍ら、謝霖とともに中国経済学会を設立したり高等教育に携わるなどした。会計学に関する教材の作成、とりわけ公会計の監查理論とその方法についての研究に取り組み、「編纂した教材は40冊に迫り、発表した学術論文は30篇に及ぶ」という⁹。

では楊汝梅の著した会計学書はどの程度利用されていたのであろうか。その疑問に対する答えを二つ挙げておく。

第一に、1934年に出版された『会計名辞彙訳』（以下、立信（1934）とする）が参考になる。立信（1934）は英語を見出しとした英漢対照の会計学用語集である。従前の会計学関連文献に出現した用語をとりまとめ、複数の既存の用語から一つの訳語を選定することを目的としている。立信（1934）が用語採集のために参照した文献数は全部で44あり、うち5冊が楊汝梅の著作である。立信会計師事務所を創設した潘序倫は、自身の関わった文献を4冊挙げているのみであり、他の著作者は多くて2冊である。44の文献中、著作者1人あたりの文献数においては楊汝梅の著作が最も数が多い。この点からも楊汝梅の出版した文献は1930年代においても大きな影響力を持っていたことがわかる。

第二に、有本（1931a）と有本（1931b）の調査が参考になる。有本邦造は1927年3月から1934年4月まで上海の東亜同文書院で簿記及び会計学

8 楊汝梅・渡邊（1907）序文に本書の著者の情報として「本書則由曾在外國語言學校清語科卒業之日人，及久留學日本，能操日語演說之華人合著」と書かれている。

9 陳元芳（2013）470-471頁を参照。

の講座を担当していた人物である。有本は1930年10月に中国内の大学30校へアンケートを発送し、会計学教育の実態を調査した。有本（1931a）には回答のあった大学の会計学科目と担任教授についての情報が、有本（1931b）には国民政府教育部へのヒアリング結果と中央大学商学院の詳細調査結果が掲載されている。有本の判断では、当時中国で簿記及び会計学の商科を最も完備していたのは中央大学商学院と暨南大学商学院だという。有本（1931b）の調査内容によれば、中央大学商学院には「会计学・審計学・成本会計・官庁会計・銀行会計・鉄路会計・会計問題・会計報告分析・高等会計・会計制度・会計師事業等の課程が設け」られていた。これら11の科目に補修課程の「簿記」を加えた12科目中、教科書を指定した科目は5科目で、いずれも英語の教科書であった。参考書に指定された書籍は合計で117冊あり、うち90冊は英語で、この時期に英語の会计学書からの知識受容が主流になっていたことを物語っている。楊汝梅の著作物は参考書として二冊、官庁会計で『新式官庁簿記及会計』と、簿記で『新式商業簿記』が推挙されている。この調査では著者名と書籍名のみ明らかにされているのみで、書誌情報は詳しくないが、陳元芳（2013）が整理した楊汝梅の出版物名と照合すると、『新式官庁簿記及会計』は1924年に商務印書から出版、『新式商業簿記』は1922年に中華書局から出版された書籍である。英語からの知識受容が主流になってきたにも関わらず、楊汝梅の著作は大学の授業で推挙されており、その有用性は教育現場でも定評があったといえよう。

3.2 雑誌『新訳界』

楊汝梅が日本語文献の中国語翻訳文を載せた『新訳界』という媒体は、清朝末期に日本で清国人留学生により出版された雑誌である。この雑誌は、さねとう（1981）で取りあげられていないせいか、従来あまり注目されてこなかった。しかしながら、最近の研究においては、その影響力について言及した論文がいくつか出てきている。

祝均宙（2006）においては中国人が日本で出版した中文定期刊行物について「1898年から1910年までの13年間」は「第一歴史段階」であり、「近代において日本で出版数量が最も多く、最も活発、最も重要な歴史段階である。この間に出版された中文定期刊行物は、90種類以上もある」と述べている。この「第一歴史段階」において刊行された雑誌はいくつかの種類にわけられているが、『新訳界』については「第3種類」に属するという。「第3種類は、西洋各国の哲学、政治、文化学術思潮を論じ、国内外の最新科学成果を紹介し、各国の風俗民情を報道する刊行物」であり、その中で「大きな影響力を持っていた」雑誌として『東亜報』『開智録』『訳書匯編』『游学訳編』『新訳界』の5つを挙げている。

張祥干（2017）は『新訳界』編集長の范熙壬の日本留学期間についての論文であるが、『新訳界』に対しその発行経緯や特徴、発行の実態を詳細に論じている。発行所は東京以外にも北京・天津・保定といった京津地区の各都市、また南京・上海・漢口といった長江流域の各都市に存在し、日本国内だけでなく、清国内にも分布していたことがわかる。『新訳界』の発行量と影響力については「今なお史料による証明が欠けている」としながらも、第6号の「緊急社告」に載った前5期分の発行数量が「数万」に及んだという箇所注目し、その時代の定期刊行物の発行数量の観点から「万以上はどれほどもない」と指摘している。

発行地の東京に限らず、清国内にも読者をもったということから、この雑誌の影響力は日本への留学生に限らず、中国内の知識人にも及んだであろう。

本稿では、『新訳界』の内容を張玉法（1985）の影印本に基づき、本文を検証していく。張玉法（1985）では現物の所在を明らかにしていないが、序文では「アメリカの各大学図書館」で探し、「日本各大学の図書館で搜索を補った」としている。張祥干（2017）の調査では上海図書館の目録に第1～7号の記載があるという。

4.『簿記精理』の用語

4.1 用語比較表

以下表2は、『簿記精理』の中国語訳語と日本語原文から今日にも通ずる会計学用語(単語・熟語)を抽出し、対照させたものである。張玉法(1985)と下野(1895)を比較の対象とし、相当する英語を載せ、対応する現代中国語も陳今池(2009)及び「术语在线¹⁰」の『管理科学技术名词』第一版」を参考に載せた。英語については、楊汝梅が『新訳界』に注記したものには「*」を、同時代の英文会計用語の参考として、楊汝梅(1908)が参考書として挙げている田尻・古館(1906)に掲載のあるものには「+」をそれぞれ語頭に付し、それ以外の英語は小川・鎌田・山田(2006)から逆引きした。また、用語の区別のため、最も左の列に登場順で連番を振った。

表2.『簿記精理』の用語比較表

連番	楊汝梅訳			下野直太郎原著		参考英語	参考現代中国語
	号	頁	中国語訳語	頁	日本語原文		
1	2	127	簿記	—	簿記	bookkeeping	簿记 / 记账
2	2	127	複式簿記	—	—	double-entry bookkeeping	复式簿记
3	2	128	会計賬簿	1	會計帳簿	account books	会计账簿
4	2	128	有価物件	1	有価物件	valuable goods	有价物品
5	2	128	財産	1	財産	property	财产
6	2	128	収支	1	収支	receipt and outlay	收入支出
7	2	129	記帳	2	仕訳	+journalizing	分录
8	2	129	結算	2	結算	+closing	结账
9	2	129	取引	2	取引	transaction	经济业务
10	2	129	損失	2	損失	loss	损失 / 亏损
11	2	129	利益	2	利益	profit	利润
12	2	129	現金	2	現金	cash	现金
13	2	130	所有權	3	所有權	ownership	所有权
14	2	130	貸金	4	貸付金	loan	贷款
15	2	130	抵当	4	抵当	+mortgage	抵押
16	2	130	支付	4	支払	+payment	支付 / 付款

¹⁰「术语在线」 <http://www.termonline.cn/index.htm> 全国科学技术名词审定委员会事务中心

清末中国における複式簿記用語の形成

17	2	130	質入満期	4	質流れ	foreclosure	取消抵押财产赎回权
18	2	130	借主	4	借主	borrower/debtor	借用人 / 债务人
19	2	130	存主	4	預り主	mortgagee	承押人
20	2	130	交換	5	交換	*exchange	交易
21	2	131	貸借	5	貸借	*debit and credit	借贷
22	2	131	損益	5	損益	*loss and gain	损益
23	2	131	商品	5	商品	+merchandise	商品
24	2	131	除買	5	掛けにて買入れ	+buy on account	除账（除买）
25	2	132	権利義務	7	権利義務	rights / obligations	权利 / 义务
26	2	132	債権債務	7	債権債務	credit / debt	债权 / 债务
27	2	132	無形物	7	無形物	intangibles	无形物
28	2	133	貸主	9	貸主	lender/creditor	贷出人 / 债权人
29	2	133	貸金借金	9	貸金借金	+loan	贷款
30	3	106	假決算	12	仮渡金	suspense payment	暂付款
31	3	106	未決算眼目	12	未決算勘定	+suspense account	暂记账户
32	3	106	決算	12	決算	closing	结账
33	3	106	受	12	受く	+receive	收入
34	3	106	授	12	渡す	+give	交给
35	3	106	貸	12	貸	credit	贷
36	3	106	借	13	借	debit	借
37	3	108	貸金不能收還	15	貸倒れ	+bad debt	坏账
38	3	110	資本主	17	資本主	stockholder	股东
39	3	110	営業者	17	営業方	management	管理人员
40	3	110	債主	17	債主	creditor	债权人
41	3	110	資本金	17	資本金	+capital ; stock	资本
42	3	110	負債	17	負債	+liability	负债
43	3	110	株式会社 (華訳作股份公司)	17	株式会社	stock company	股份公司
44	3	110	受入	17	受く	+receive	收入
45	3	110	授出	17	渡す	+give	交给
46	3	111	約束手形 (華訳作期票)	18	約束手形	*promissory note	期票
47	3	111	應付手票	18	支払手形	*bills payable	应付票据
48	3	111	除賣	18	掛売	+sell on account	除账（除卖）
49	3	113	借方	20	借方	+debit ; debtor (Dr.)	借方
50	3	113	貸方	20	貸方	+credit ; creditor (Cr.)	贷方
51	3	115	原価	24	原価	cost	成本
52	3	116	消殺	26	消殺	offset	抵消 / 冲销
53	3	118	分録	30	仕訳	*journalize	分录
54	5	83	款項	33	勘定	+account	账户
55	5	83	転記	33	転記	+posting	过账

56	5	83	資本金	33	資本	+capital ; stock	資本
57	5	83	残額	34	残高	+balance	余额
58	5	84	手中餘金	35	手許残高	+cash on hand	库存現金
59	5	88	諸疑	39	諸口	+sundries	杂項
60	5	89	借貸平均	40	借貸平均	balance of debit and credit	借貸平衡
61	5	89	試算表	40	試算表	+trial balance	試算表
62	5	90	款項名目	41	勘定科目	account title	会计科目
63	5	91	資産	42	資産	+resources ; assets	资产
64	5	91	資産負債款項	43	資産負債勘定	assets and liabilities accounts	资产负债科目
65	5	91	損益款項	43	損益勘定	profit and loss accounts	损益汇兑账户
66	5	92	実在利益	45	正味利益	gross profit	毛利
67	5	92	実在資産	45	正味資産	gross asset	资产总额
68	5	93	純利益	46	正味の利益	gross profit	毛利
69	5	94	純益金	48	純益金	+net gain	净利润
70	5	94	当期利益金	48	当期利益金	net profit	净利润
71	5	95	残額款項	49	残高勘定	balance of account	账户余额
72	5	97	実有之資本金	51	正味の資本金高	net capital	资本净额

表2の抽出語数合計は72個¹¹、うち中国語訳語と日本語原文が同形語となっている語は39個で、全体に占める割合は54%であった。中国語訳語、日本語原文、現代中国語の三つ全てが同形語となっている語は18個で、全体に占める割合は25%であった。つまり、楊汝梅の訳語は多くを日本語の漢語をそのまま利用したが、現在に至るまでにそのほぼ半分は何らかの理由により残らなかったと言える。

次節より、下野（1895）と楊汝梅（1906-07）で同形語であったが現代中国語に残らなかった訳語21個¹²、下野（1895）と楊汝梅（1906-07）で同形語でありかつ現代中国語にも残った訳語18個、下野（1895）と楊汝梅（1906-07）で異形語であるが現代中国語に残った訳語1個について、個別に見ていく。

11連番1「簿記」と連番2「複式簿記」は楊汝梅の「緒言」に書かれている。しかし楊汝梅の「緒言」の内容は下野（1895）の「緒言」とは異なり、純粋な訳文ではない。下野（1895）の「緒言」には「簿記」の用語が登場するが、「複式簿記」は全体を通して1回も出現しないため、ここでは日本語原文を対応する用語なしとした。

12この21個は中国語訳語と日本語原文が同形語となっている語39個から現代中国語にも残った訳語18個を引いた数字である。

4.2 下野原語と楊汝梅訳語が同形だが現代中国語に残らなかった訳語

下野（1895）と楊汝梅（1906-07）で同形語であったが現代中国語に残らなかった訳語は21個ある。その中から中国語と日本語の特徴を色濃く反映していると思われるいくつかの用語について、日本語における会計学用語の事情を勘案しつつ、考察していきたい。

■ 9. 取引

簿記上の「取引」は日常語の「取引」とは意味が異なり、「資産・負債・純資産を増減させる経済事象」である。したがって、物を売ったり買ったりする時に使う「取引」とは異なり、会計学の学術用語としての理解が必要である。日本語では明治期よりそのまま「取引」が用いられ、現在にまで残っているが、楊汝梅訳の中国語では日本語そのままの「取引」が使われている。本文中の初出では「凡不由他事而生出財産之増減変化謂之取引」のように解説されているが、これは専門用語として区別するために日本語をそのまま用いたと思われる。続く謝霖・孟森（1907）でも「取引」は使われた。立信（1934）によれば、英語のTransactionに相当する中国語の用語として「取引」「往來事項」「事項」「交易」があったという。立信（1934）は、Transactionについては最も多くの文献が採用してきた「交易」を選定した。以後、『管理科学技术名詞』第一版に見られるとおり、現在に至るまで「交易」は用いられている。陳今池（2009）は「经济业务」を挙げているが、これはより専門的な訳語といえるだろう。

■ 41. 資本金

現在、日本語ではCapitalの訳語として「資本金」あるいは「資本」が用いられるが、中国語では「資本」のみが用いられている。中国語では語素としての「本」のみで金銭の意味をなすことができ、現代中国語でも「翻本」「够本」「亏本」「捞本」「赔本」「折本」など数多くの二字漢語を構成し、豊富な造語力を発揮する。一方、日本語では「資本」のみで「もとで」という意味を表すには難しく、特に簿記の勘定科目において出資した金額を

記帳するには「資本金」の勘定科目を用いる。中国語においては「資本金」となると、金銭を意味する語素が「本」と「金」で重複するため、熟語として成立しがたい。よって、楊汝梅の訳語としては下野（1895）の「資本金」をそのまま「資本金」と訳しているが、「營業資本金」を「營業資本」のようにわざわざ「金」を除いて訳しているところもある（原著17頁、訳文3号110頁）。立信（1934）は英語のCapitalに相当する中国語の用語として「資本金」「資本主」「資本」「股本」「股本金」があったとし、最終的に「（一）資本（二）股本」を選定している。立信（1934）では著者別に32人（政府機関なども1人として数える）44冊の文献から訳語を採録しているが、「資本金」は5人、「資本」は7人の著者が使っていたことがわかる。立信（1934）の選定した「資本」は現代までそのまま残り、潘序倫（1951）、娄尔行・法雷尔（1985）、陳今池（2009）ともに「資本」のみを挙げている。

日本語において「資本金」という用語に「金」がつくことに関して疑問が呈されたことがある。1938年7月に出版された雑誌『會計』の「資本概念討究」という記事に「資本金」という言葉をめぐっていくつかの意見が交わされた記録がある。1938年5月21日に開催された日本会計研究学会第一回大会における「資本概念討究円卓討論会」の速記録である。学術用語としての概念と語素の関係について有用な資料であるため、一部を以下に引用する¹³。

岡田 キヤピタルといふ言葉は資本と譯された方が便宜であると思ひます。資本といふ言葉と資本金——金といふ字が私嫌ひであります。なんとすれば金の字がついて居ると本當の金は現金、他の金は皆賈金（笑聲）、それで準備金の如きは額面の數字、それにみんな金がついてゐるのですから、先程どなたか價值がないと仰せられたが、吾々の立場から申しますと、先生ですから、教へる所に價值があるかといふことに一番重點を置いて居る、それで資本と資本金と分けて見るといふことも一つの方法である、餘りいゝ方法ぢやないでせうが、シエヤー

13日本會計研究學會（1938）221-222頁から引用。

の言ふ資本と資本金は別だと思ひます。

(中略)

岩田 只今金が大變嫌がられましたが、會計學の概念は全部數字を伴つて居るのでありまして、數字を離れて資本の概念はない。私は資本と申します時にもあれは具體的なものを示すものではなくして、在高を示す。抽象的なものでありますけれども、數字であらはされて居るのでありまして、資本在高、積立金は積立在高であります。さういふ意味で金といふ字を金額といふ意味に解釋していゝのぢやないかと思ひます。

岡田 私はいつも説明する時に、現金、正金とあるけれども、單純に金額といふ意味に取らなければならんと説明して居ります。今仰しやる通り總てが金なんですから特に金をつける必要はなからう。或るものにはついて居る、或るものにはついて居らん時に誤解を招く、その意味に於て金を嫌ふ、實は金は好きな方ですけども、これが嫌ひなんです。

三邊 若し金の字を取つて額とか何とかいふ字で表すことが出来るなら、

岡田 さうです。今更取りますと非常に分り難くなりますから、やはりつけて置く方がいゝと思ひます。

このように、日本語でも「資本金」と「資本」に「金」がつくことに關して、違和感を覚えた會計学者が存在し、いくつかの意見が交換されたが、この場合の「金」は金銭の意味ではなくて金額という理解でそのままにしておいた方がよいという結論になった。

中国語においては先にあげたとおり、1930年代より會計学用語の辞書類に「資本金」が掲載されることはなく、ずっと「資本」のままであつた。この理由としては、金銭の意味をもつ「本」と「金」の重複が忌避されたため、あるいは二音節語のほうが他の單語とフレーズを成す時（たとえば「流動資本」「実収資本」など）に便利であつたためだと考えられる。この

傾向は他のフレーズにも見え、日本語の「資本剰余金」「利益準備金」にあたる用語としては現代中国語で「資本公积」「盈余公积」が用いられており、これらのフレーズにわざわざ「金」が付けられることはない。

4.3 下野原語と楊汝梅訳語が同形でありかつ現代中国語に残った訳語

下野（1895）と楊汝梅（1906-07）で同形語でありかつ現代中国語に残った訳語は18個ある。この中の訳語は会計学用語として日本語から中国語へ入ったものとみなしてよいと考えるが、明治期に日本語の会計学用語として造語されたものか、もしくは漢籍に典拠をもつものかは個別に検討が必要である。

■ 49. 借方 / 50. 貸方

「借方」「貸方」は複式簿記の用語である。記帳対象とする取引を借方と貸方に同じ金額で別々の勘定科目に分けることが複式簿記のスタートである。この借方と貸方は、複式簿記がもともと債権債務の記録から来ていることから Debtor side と Creditor side あるいは Debit と Credit の翻訳語として日本で生成した用語である。

下野（1895）はこの借と貸の概念について、多くのページを割いて解説している。現在の簿記教育においては、「借方」がなぜ「借」であるのか、「貸方」がなぜ「貸」であるのかといったことを踏み込んで解説することはほとんどない¹⁴。下野（1895）の解説する貸借概念について、原著と訳文を見てみたい。

下野（1895）24頁：本来貸借は人の働きなり。然るに今事物をも人の如く見立てて此働きを付与したるなり。今某甲に貸を生ずれば某甲は借方即ち負債主の地位に立つべきなり。又某甲に借を生ずれば某甲は貸方即ち債主の地位に立つべきなり。右は唯だ其視点を異にするの

¹⁴餅川（2010）によれば、高等学校における簿記の導入指導について「“借方”（debit）・“貸方”（credit）」という用語をあえて使用しないで、「左（側）」・「右（側）」と言っている教員も多くいる」という。

みにして、貸借なる語は普通の意義に戻る処なし。左れば今或る有価物件を受けたるときは其有価物件を人と見立て、之に貸を生じたりと見做し、其有価物件を借方即ち負債主の地位に置くなり。右は一見奇異の感を生ずれども能く其意義を吟味するときは真理の其中に存するをを発見すべし。

楊汝梅（1907）3号115頁：本来貸借者，人之働作也。今附與人之働作於事物，則凡事物皆可作人觀。今生貸之關係於某甲，則某甲即借方而立於負債主之地位。生借之關係於某甲，則某甲即貸方而立於債主之地位。右所舉例，唯異其視點，而貸借之意義。與普通所稱者，並無差異。然則或受一有價物件，而以有價物件作人觀，而生貸之關係於此，則有價物件即借方立於負債主之地位矣。右所舉例，一見而生奇異之感，然試深察其意，而真理自寓於其中。

ここでは、たとえば商品を受取った時に資産の増加として借方に記帳するような場合の取引について解説している。簿記上の取引を借方と貸方に分けることは、本来人の働きである貸借を事物にも適用しているということである。また、次の箇所では「借方」と「貸方」という用語を用いることは偶然ではないと述べている。

下野（1895）27頁：以上説く処は金銭貸借を基礎とし、元來人に属する働きを事物に迄も推及ぼしたるなり。此解釈は借方貸方なる語を用ゆるの偶然ならざるを示すものにして、後に至り勘定報告面の借貸を理解するに方り、特に其必要を見るべし。

楊汝梅（1907）3号116～117頁：以上所説，以金銭貸借為基礎，將原來屬人之働作，推之使屬於事物也。此解釋所以明借方貸方之語，非偶然用也。欲明後所示賬項報告面之借貸，此理解特為至要。

下野（1895）の述べるところによれば、「借方」と「貸方」の用語を使うことは、財務諸表における借貸を理解するにあたり、必要なことである。

ここで一つ問題となることだが、そもそも中国語では「借」と「貸」の字義は、相原（1980）の研究にあるとおり、両義性を具えており、「借」「貸」

どちらも「借りる」と「貸す」の意味をもつ。よって、「借方」と「貸方」を日本語からそのまま中国語に訳したとしても、どちらが「借り」なのか「貸し」なのか、理解することは不可能である。中国語として「借り」と「貸し」という相対する方向性を用語で表すためには、「借方」は「借方」そのままで、「貸方」は「借給方」とでも訳すしかなかったかもしれない。楊汝梅の著した日本語教科書に日本語の動詞リストが掲載されているが¹⁵、そこには「借る 借也」「貸す 借給也」のように記載されているからである。しながら、学術用語として相対する意味の用語を字数、あるいは中国語であれば音節数の異なる単位とするのは、適当ではなく、やむを得ず「借」と「貸」の字をそのまま生かしたのだと考えられる。「方」については、中国語においても「相対するものの一面」や「対立するものの一方」の意味をもつため¹⁶、「借方」と「貸方」の場合は日本語そのまま「方」を用いても全く問題はなかったであろう。

複式簿記用語としての「借方」「貸方」は楊汝梅（1906-07）以来、謝霖・孟森（1907）でも踏襲され、日本語からの借用語としてそのまま中国語へも入った。1915年初版の『辞源』には次のような語釈が載っている¹⁷。

【借方】日本簿記上用語。為貸方之反對。我國稱為借項貸項。舊習作各存各該。在簿記法，無論依何理由，凡入於自己之手者，皆為借。記於借方欄。故收入之貨價亦為借方。

【貸方】日本簿記上用語。簿記法，凡由自己之手而支出者皆為貸。記於貸方欄。故支出之物價亦為貸方。

1910年代は「左方」「右方」のような用語も出現したが、1930年代に立信（1934）が「借方」「貸方」への統一を提案、1951年の潘序倫（1951）でも変わらず「借方」「貸方」として残った。

1960年代以降は増減記帳法や収付記帳法などと競合し、「増」「減」や「収」

15楊汝梅・渡邊（1907）の149～168頁。

16統三義（2018）は中国語で「対立するもの」を表す場合「側」は非文法的であるが、「方」か「方面」を使えばいいという。

17方毅他（1918）の民国七年九月第十版を引いた。

「付」が使われることもあったが、1992年公布の『企業会計准则』に「会計帳法採用借貸記帳法」という文言が明記されたことにより、「借方」「貸方」が広く使用されることとなった。

このように、現代にまで残された「借方」「貸方」という用語の中国語における初出は楊汝梅（1906-07）であったとすることができるだろう。

4.4 下野原語と楊汝梅訳語が異形であるが現代中国語に残った訳語

下野（1895）と楊汝梅（1906-07）で異形語であるが現代中国語に残った訳語はわずかに1つであるが、今日まで長く用いられている用語である。

■ 53. 分録

帳簿の記録において1つの取引を借方及び貸方の勘定に分けて記録することは複式簿記の根本原理である。この勘定を借方と貸方に振り分けることを英語で Journalize といい、日本語ではこれを明治期に「仕訳」と訳し、下野（1895）も現代までも同じ「仕訳」を用いている。一方の中国語ではこの「仕訳」が理解しにくかったらしく、楊汝梅（1906-07）では下野（1895）の原文「取引中に含まれたる計算の要素を見出して之を借貸双方に振分けることを仕譯と称す」を「將取引中所含之計算原素尋出分記之於借貸双方名之曰分録」と訳し、その後ろにカッコ書きで「Journalize 日本名仕譯我國人苦於了解今改訳分録二字而書英字於此以供參考」とコメントを挿入している。

「分録」を Journalize の訳語として用いたのは楊汝梅が最初といえる。現代の中国語会計学用語でも「分録」は Journalize に相当する用語として用いられているため、中国語話者によるオリジナルの訳語として中国人に受け入れやすかったのだと考えられる。文字列としての「分録」は『四庫全書総目提要』にも見え、楊汝梅による造語ではないことは確かであるが、清末に新たな意味が附加され、今日にまで残ってきていることは特筆に値するであろう。

5. 結論

蔡錫勇（1905）と謝霖・孟森（1907）が中国で最初期の会計学文献であることは間違いないのであるが、その間に出版された雑誌『新訳界』に掲載の楊汝梅（1906-07）もまた注目に値する文献である。訳者の楊汝梅は清末に日本へ留学、商業学を学び、民国期中国の会計学教育に多大な貢献を成した。「取引」のような和製漢語の使用は中国語に根付かなかったが、「借方」「貸方」のような日本語からの借用語を中国語に入れる役割を果たした。また、「分録」のような楊汝梅自身が新たな意味づけを施した単語も現在まで使われ続けている。

参考文献

●日本語文献

- 相原茂(1980)「中国語動詞の特異性と普遍性——見相反する意味をもつ動詞を例として」『中国文化』漢文学会会報, 38号15-35頁
- 有本邦造(1931a)「支那における会計学教授の現状(其一)」『會計』森山書店, 第28巻第5号119-125頁
- 有本邦造(1931b)「支那における会計学教授の現状(其二完)」『會計』森山書店, 第28巻第6号125-141頁
- 有本邦造(1934)「最近支那会計文献」『會計』森山書店, 第34巻第1号139-149頁
- 井上哲次郎(1881)『哲学字集』東京大学三学部
- 王嵐(2004)『戦前日本の高等商業学校における中国人留学生に関する研究』学文社
- 大倉義雄(1938)「神馬氏複式簿記の日本輸入」『會計』森山書店, 第42巻第5号107-116頁
- 小川洸・鎌田信夫・山田庫平編著(2006)『現代英和会計用語辞典 三訂版』同文館出版
- 興亜院政務部(1942)「日本留学支那要人録」梶木瑞生(2014)『日本留学中国人名簿関係資料第4巻』龍溪書舎に収録
- さねとうけいしゅう(1981)『増補版 中国人日本留学史』くろしお出版
- 下野直太郎(1895)『簿記精理』
- 邵藍蘭(2011)「中国における初期の簿記書」『札幌学院大学経営論集』札幌学院大学総合研究所, 3号

- 祝均街（2006）「辛亥革命前後日本で出版された中文定期刊行物概論」『図書館界』日本図書館研究会，57巻6号382-386頁
- 続三義（2018）「“供给侧”の非文法性」『東方』東邦書店，450号
- 東京高等商業学校（1908）『東京高等商業学校一覧 従明治四十一年至明治四十二年』一橋大学機関リポジトリ
- 東京高等商業学校（1910）『東京高等商業学校一覧 従明治四十二年至明治四十三年』一橋大学機関リポジトリ
- 田尻常雄・古館市太郎（1906）『英文簿記教科書』三友書院
- 日本會計研究學會（1938）「資本概念討究」『會計』森山書店，第43巻第1号188-226頁
- 餅川正雄（2010）「高等学校における「簿記」の導入指導に関する研究」『広島経済大学研究論集』第33巻第2号
- 森川鑑太郎（1901）『修正 銀行簿記学 第五版』同文館

●中国語文献

- 蔡錫勇（1956）《伝音快字》文字改革出版社
- 陈今池（2009）《英汉现代财会大词典》中国财政经济出版社
- 陈元芳（2013）《中国会计名家长传略》立信会计出版社
- 方毅他編校（1918）《辭源》商務印書館
- 郭道杨（1988）《中国会计史稿 下册》中国财政经济出版社
- 立信會計師事務所編（1934）《會計名辭彙訳》商務印書館
- 娄尔行、约翰・B・法雷尔主编（1985）《英汉・汉英会计名词汇译》上海人民出版社
- 馬西尼著 黄河清訳（1997）《現代漢語詞匯的形成：十九世紀漢語外來詞研究》漢語大詞典出版社
- 潘序倫（1941）「論連環帳譜」《計学雜誌》第1巻第1期3-8頁
- 楊汝梅・渡邊直助（1907）《日語用法自習書》清国留学生會館、李長波（2010）『近代日本語教科書選集 第5巻』クロスカルチャー出版に収録
- 楊鑫（2005）「经济学研究中的两件往事—访日难忘的记忆」《无锡南洋学院学报》第4巻第1期56-59頁
- 張祥千（2017）「日本留学时期的范熙壬（1903-1909）」《荊楚學刊》第18巻第2期80-85頁
- 張玉法主編（1985）《清末民初期刊彙編 新訳界（一）～（三）》經世書局
- 周元武・许建国主編（2008）《湖北经济学院校史（1907-2007）》崇文書局

●英語文献

- Federico Masini（1993）The formation of modern Chinese lexicon and its evolution toward a national language : the period from 1840 to 1898, Project on Linguistic Analysis, University of

California